

1884年ニューオーリンズ万国博覧会と日本の展示

1884 New Orleans World Exposition and Japanese exhibition

楠元町子

KUSUMOTO Machiko

キーワード：ニューオーリンズ万国博覧会 日本の展示品 産業革命

1. はじめに

ニューオーリンズ万国博覧会は正式名称を“World’s Industrial and Cotton Centennial Exposition”といい、日本では「万国工業兼綿百年期博覧会」と称され、1884（明治17）年12月16日から1885（明治18）年5月31日まで米国ルイジアナ州ニューオーリンズ市で開催された。

ニューオーリンズ万国博覧会は米国南部の重要産物としてのcottonがニューオーリンズの港からイギリスに向けて初めて輸出されたのが1784年だったという理由で、百周年を記念するための万国博覧会を1884年に開催しようという機運が高まったこと¹、南北戦争に敗北した南部が20年後に商工業を発展させることでいかに立ち直ったかを世界に示す目的もあった。

この博覧会では有色人種部門（Colored Department）と女性部門（Woman Department）が特別に設置され、教育部門（Education Department）では世界各地から展示品が集められ多くの教育者たちがニューオーリンズを訪れた²。

米国は南部で初めて開催されるニューオーリンズ万国博覧会に、屋根より四壁に至るまで総てガラス板を張り詰めた園芸館を建築したり、遠く欧州諸国にも委員を派遣したりした³。参加国の大半が展示に熱心でなかったにもかかわらず、国家的展示をしたのが中国、日本、メキシコであった。Lafcadio Hearn（1850-1904）のちの小泉八雲はニューオーリンズ万国博覧会取材して、『ハーバース・ウィークリー』に次のような記事を掲載した。本館を訪れる見物者たちの関心は、現在のところ日本の展示物にとくに引きつけられがちである。それが、他の東洋の国々やヨーロッパ諸国の展示物よりはるかに完成しているといっただけからである⁴。

万国博覧会は展示を通して、開催国の世界観や参加国がどのように自国を捉え、何を世界にアピールしたいのか如実に表している。英国で1760年代に始まった産業革命は、米国では南北戦争後本格化し、日本では1890年代にイギリス同様綿工業を始めとした軽工業、あるいは繊維産業を中心に展開された⁵。ニューオーリンズ万国博覧会が開催されたのは、日本の産業革命が進行していた時期であった。日本の産業革命には江戸時代からの在来産業が大きな役割を果たしており、展示品を考察することで、日本の近代化のあり方を明らかに出来ると考える。

ニューオーリンズ万国博覧会に関する主なる研究としては、「1884 - 5年ニューオーリンズ万国博覧会における日本の教育の紹介」の平田の研究⁶、小泉八雲との関係からニューオーリンズ万国博覧会を述べた高梨の論文⁷「ハーンは浮世絵に何を見たか」などがある。本稿はこれらの貴重な研究を踏まえて、ニューオーリンズ万国博覧会のガイドブックやカタログ、日本の外交資料、当時の新聞記事を考察することにより、日本の展示物を明らかにし、明治政府の産業政策や世界の状況を明らかにしたい。

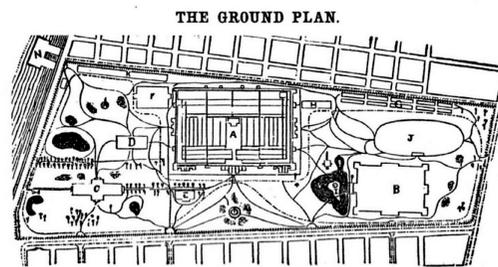
2. ニューオーリンズ万国博覧会の概要

ニューオーリンズ万国博覧会 (World's Industrial and Cotton Centennial Exposition) は、1884 (明治17) 年12月16日から1885 (明治18) 年5月31日まで、米国ルイジアナ州ニューオーリンズ市、アッパー・シティ・パークで開催された。入場者数158,840人、会場面積249エーカー、参加国は日本、中国、ロシア、イギリス、オランダ、ベネゼエラ、ハワイ、ベルギー、シャム、ドイツ、ブラジル、ジャマイカ、グアテマラス、フランス、オーストリアなど27国⁸であり、1880年代の世界の主要国は参加していた。

会場(図1)には本館(Main Building)、政府並びに各州出品館(United States And State Exhibits)、園芸館(The Horticultural Hall)、動物館(Factories and Mills)、美術館(The Art Gallery)などが建築された。本館(図2)は未曾有の巨大建築物で「中央ニハ奏楽堂ノ設ケアリ内ニ十

万〇千人ヲ入ル席ヲ設ケ而シテ其前面ト左右ノ両側トハ内地並ニ外国出品ノ陳列場ニ充テ后面機械出品ノ陳列場に充タセリ。」⁹本館内の邦楽堂で開会式が遂行された。園芸館(図3)はガラスと木材で出来ており、1851年のロンドン万博の水晶宮をモデルにしている。当時としては世界最大のgreenhouseだっただけでなく、ニューオーリンズ万国博覧会後も会場に残存していた唯一の建築物だった¹⁰。

“Visitors' Guide to the World's Industrial and Cotton Centennial Exposition and



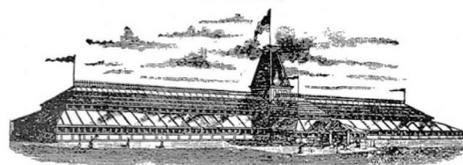
Scale 1,430 feet to the inch.
 A—Main Building. E—Art Gallery. I—Grand Fountain, eighty feet high.
 B—United States and State Exhibits. F—Factories and Mills. J—Live Stock Arena.
 C—Horticultural Hall. G—Live Stock Stables, Etc. K—Saw-mills and Wood-working Machinery.
 D—Mexican Building. H—Restaurants and Refreshments. N—Wharf, Mississippi river.

(図1 会場全景)



THE MAIN BUILDING.

(図2 本館)



THE HORTICULTURAL HALL.

(図3 園芸館)

New Orleans”ではニューオーリンズ万国博覧会の開催理由として、「進歩的な農業者と工業者が米国南部諸州の資源、能力、製品の知識を世界に示すことであり、最も重要な機能の一つは南部の有色人物の展示である。これは、彼らが奴隷から解放されて以来、彼ら自身が進歩を遂げたことを示す為に、彼らに与えられた最初の公的機会である。」¹¹と書いてある。THE COLOR D PEOPLEがニューオーリンズ万国博覧会を特徴出来る最も重要な展示であった。

3. 米国の展示

1) THE COLOR D PEOPLE

“*The World’s Industrial and Cotton Centennial Exposition, New Orleans, 1884-1885.*”には、THE COLOR D PEOPLEの展示の内容を次のように紹介している。「黒人が技芸や科学の分野でどんな進歩をしているのか見せる機会を黒人に与えるというアイデアを、とくに、Burke総裁（Director General）が気に入っていたので、別の独立した部門がその作品展示に当てられた。政府棟の北側展示室はすべて、その展示品で占められ、黒人の手工芸品で見事に埋め尽くされた。」¹²

この部門の来場者の多くは、黒人が手掛けた豪華な展示に対して驚き、発明品の展示の豪華さに黒人が相当進歩していることがわかった。特にニューヨーク州からの数々の発明品は、創意性と有用性を兼ね備えていた。来場者がとどまる時間が最も長かったのは、工芸品の展示であった。「ワシントン州とルイジアナ州からの展示品はとくに注目を集めており、実際、際立って優れていた。コネチカット州とアラバマ州から出品された黒人の展示物は、おそらく最も完成度が高く、見る人の心に、こうした州に住む黒人は素晴らしい進歩をしているという印象を残したと思われる。ワシントン州のColbert女史が手掛けた一羽のコウノトリと、ガマ、シダ、スイレンが織りなす美しいデザインもあった。この州の展示を通り抜けると、黒人女性による縫製品の見本がたくさん並び、ファイアースクリーン、黒檀の木彫り、窓飾り、ブラッシュパネル、ろうや毛を使った作品も大量に置かれていた。」¹³

THE COLOR D PEOPLEの展示では、黒人が発明したものや製作した工芸品だけでなく、世界各国の黒人の第一人者たちをクレヨンで描いた肖像画も飾られていた。ハイチの独立の英雄であるトゥーサン・ルーベルチュールの見事な肖像画も複数あった。「最も目を引いた展示の一つに、ハイチの歴史を描いた生糸の刺繍作品があった。上記の英雄の頭の上には、『第1位の黒人』という言葉が赤い生糸で刺繍されていた。」¹⁴さらに、監獄の独房にいるトゥーサン・ルーベルチュールの姿や、フランスに支配されていたサント・ドミンゴでの様子や独立の戦いなどの描いたパネルが多数展示されていた。

「黒人部門に展示されていた品物の数は数千にのぼり、人を惹きつけるその美しい展示には、この部門を作り上げる上でBurke総裁が見せた知恵が表れており、あらゆる様々な産業分野で黒人が大きな進歩をしていることを十分に示すものであった。」¹⁵

奴隷制度の廃止によって、黒人の法的立場には変化があったが、かれらの経済的・社会的立

場は白人に比べて良くはならなかった。1880年、南部の全黒人の約90パーセントが農業か召使か使用人などの奴隷制時代と同じ職業に従事していた¹⁶。1883年最高裁が路面鉄道、ホテル、劇場、公園などの公共施設における隔離を禁止した1875年公民権法を却下し、1880年代に「分離すれども平等」の施設に閉じ込めることができるという原則が確立した¹⁷。

ニューオーリンズ万国博覧会が開催された頃、黒人は経済的にも法的にも白人と同じ立場ではなかった。

2) 米国の展示の評価

“*The World’s Industrial and Cotton Centennial Exposition, New Orleans, 1884-1885.*”では、ニューオーリンズ万国博覧会について1876（明治9）年に米国で初めて開催されたフィラデルフィア万国博覧会と比較して以下のように述べている。

万国工業兼綿百年期博覧会の偏見のない有能な審査員の心の中では、現代の実に盛大な万国博覧会の一つという判断が下されている。米国の資源を示すことにおいては、フィラデルフィア万国博覧会をはるかに上回る成功を収めたが、外国からの展示の完全性や来場者の数という面では、その米国初の盛大な世界博覧会（フィラデルフィア万国博覧会）にはるかに及ばなかった。政府並びに各州出品館（図4）はそれ自体が万国博覧会の完成度の高さを証明し、その中にはかつてないほどの展示品のコレクションがあった。ユタ州とアラスカ州を除くすべての州と準州が小規模な出展をしていた一方、政府による展示はこれまでで最大のものであった。外国からの展示品は別として（そのうち国家的な性質のものであったのはメキシコ、日本、中国など、わずかであった）、政府棟以外の建物と構内の内容はすべて、米国の州と領土の製品であった¹⁸。



（図4 政府並びに各州出品館）

外国からの展示が少なかったこともあり、かなり大きなスペースが米国に当てられ、米国の歴史、産業、風土のすべてが理解できる展示となった。

小泉八雲は、米国の展示について、合衆国全土の自然や工業の知識とこの博覧会のために特別に準備された素晴らしい風景写真から個々の地域の全体像を知ることができるだけでなく、「アメリカの発明の歴史の全貌—無数の方式の蒸気機関、蒸気による脱穀機と掘削機械、刈り取り機、ろうのように鉄を鑄造する巨大な地の精ともいえる機械、さらに、縫い、熔接し、粉碎し、蟻継ぎし、剪断し、斜め切りし、回転し、計量し、織り、紡ぎ、挽き、合板を作る機械の発展—は、合衆国特許局の模型によって十分に研究できるだろう。」¹⁹と賞讃している。

米国の豊富な資源と産業の発達、黒人の進歩を世界に示す展示を行なったニューオーリンズ万国博覧会で、他国が展示にあまり熱心でなかった中、国家的展示を実施したのが、有色人種の国である中国と日本であった。

4. 中国の展示

1) 万国博覧会と税関（中国海関）

中国の展示品は、1851（嘉永4）年第1回ロンドン万国博覧会から大きな存在感を發揮していた。「中国から大きな花瓶・清朝官僚の肖像画・青銅器・陶磁器・屏風・牙彫・七宝焼などが展示された。その中の中国からの陶磁器とベッドのフレームが展覧会から賞を授与された。」²⁰

これらの展示品は中国の福州駐在総領事を務めたオールコック（Sir Rutherford Alcock, 1809-1897年）が送ったものであった。

1867（慶応3）年パリ万国博覧会では、中国からは正式には誰も派遣されず、旗幟の新鮮さと冠や服の華麗さで人目を引いていた広東の劇団の一行や、中国パピリオンで中国の伝統的な衣装を身にまとい、客に中国特産の茶を供していた数名の女性のみが見られた²¹。イギリスは関税業務を行う中国の行政機関として海関を設立させ、ロバート・ハートを総税務司に任命して、中国貿易を管理させていた²²。

1873（明治6）年ウィーン万国博覧会では、中国はオーストリア政府からの外交的圧力もあり、中国海関の統括者たる総税務司ハートに万国博覧会への出品業務を委任した。これまでの万国博への中国の出品と比べて、その数量・種類とも何倍にもなり、評価も高かったので、1905（明治38）年のリエージュ万国博覧会まで税関（中国海関）が万国博覧会への出品業務を行うようになった²³。

博覧会は税関に二つの意味で絶好の機会を与えた。一つは、税関は展示を通して、中国政府に税関の業務を理解してもらうことができた。もう一つは、西洋の必要に応じて展示品を準備し、中国の経済、文化を解釈してみせることで、西洋側にも信頼され、称賛を受けた²⁴。1883（明治16）年のロンドン漁業博、1884（明治17）年ロンドン衛生博では、イギリス政府を代表する博覧会の主催者が、中国から出品されるべきものを具体的に提案していたようである²⁵。

ニューオーリンズ万国博覧会でも、中国の展示に税関が果たした役割は大きかった。

2) 中国の展示

ニューオーリンズ万国博覧会における中国の展示について、日本のコミッショナーの高峰讓吉が「単ニ綿ノ百年期ヲ祝スルノ意ナランカ其出品ハ綿類一式ヲ持出セリ即チ木綿織ノ衣服其他足袋等ニスギナリシ。」²⁶と述べているように、綿工業が中国の主要な産物であったこともあり、米国が望む綿の産業が中心の展示となった。

“*The World's Industrial and Cotton Centennial Exposition, New Orleans, 1884-1885.*”では、中国の展示品について次のように記述している。「中国代表のコミッショナーはW. F. Spinney氏とJ. Neumann氏であった。この2人の紳士が統括していた展示場は、印象的で美しいものであった。手の込んだ大きなガラスのランタンには、小さな玉を通したひもをバゴダのいろいろな部分に吊るした飾りがあり、その一方で、絹の飾りが東洋的なデザインの優雅さと美しさを増していた。別の場所では、中国の様々な衣装を着せた等身大の中国人

形が並んでいた。婚礼衣装を身に付けた一般的な階級の花嫁、冬の衣装を纏った中国の上級官吏、被り物から靴に至るまで白の正装をした喪に服している未亡人、帳簿と計算盤を持った貨幣鑑定人、黄色の袈裟を纏い、その頭には、熱した竹で焼き付けたやけど跡があった仏僧、商品の箱をいくつか背負って運んでいる行商人の人形があった。』²⁷ 原始的な数種類の灌漑用ポンプの展示もあり、中国の生活や文化を人形の服装や持ち物で表し、米国人の好むオリエンタリズムあふれる遅れた中国を展示していた。

正絹の見本、色とりどりの中国製綿ベルベット、あらゆる種類のタオル地、豪華なカーペット、高雅な式服、見事なラグの見本もあったが、中国の展示で際立っていたのは、綿の生産の展示であり、その栽培品の分野における中国の産業が丁寧に説明されていた。中国で行われている綿産業が誰にでも理解できるように、すべての製綿機械と作業している人の人形を一緒に以下のように展示した。

「綿繰り機には、それを使っている男の子の人形、フロッキング・ボウ（綿を詰める弓）には綿をほぐして広げる弓弦を木槌で叩いている人の人形、綿紡機には糸を紡いでいる女性の人形、織機にセットする前に紡ぎ糸の準備をする機械には複数の人形、織機や糸巻機にも作業している女の子の人形が添えられていた。圧搾作業は男性1人で行い、綿がずだ袋に入ったらその中に飛び降りて、できるだけカサを小さくするよう飛び跳ね続ける。その他にも、白い房状の綿、同じ製法による茶色の綿、白・黒・黄色・茶色の綿実、小袋に入ったあらゆる種類の圧搾されていない綿、開いた状態の綿の莢、綿実粕ならびに綿実油の見本があった。』²⁸ 機械化されていない、全て人間の力で行い、女性も男性も働く遅れた中国の綿産業の現状を表していた。

「中国は実際、播種から、布としての販売まで、綿という植物の一連のサンプルを展示していた。その他にも、あらゆる色の布製品にミックスされた綿と絹の見本があり、様々な織度の白綿布と染綿布、油布、ラムウールを模した冬用裏地、綿カンバス、ずらりと並んだ綿製品、手の込んだ捺染布、多種類の上質素材が展示されていた。中国の展示は、好奇心を大いにそそり、豊かで、多様なものがあり、見物客すべてに教訓をもたらすものであり、担当のコミッショナーたちは来場者に対し、その展示に関するあらゆる詳細を十分説明することに大きな喜びを感じていた。』²⁹

3) 中国の展示の評価

小泉八雲は中国の展示品について次のように評価している。「中国の展示品は実質的に綿花の陳列であるが、およそ実用の世界に縁遠い見学者にとってさえ、本館のなかでこれほど珍しく、魅力的なものもあるまい。それは黄帝の国からこの地に移された正真正銘の産業博物館であり、単に紡織用糸、織物、織物機械が陳列してあるのではない。綿繰り、機織り、染色の全行程が、仕事に従事する中国人の職人や労働者たちを完璧に再現した人物像を交えた模型で示されていた。』³⁰

中国の展示は中国の綿工業は従来の古い方法でなされ、ほとんど手作業でやっていることを

如実に表していた。“*Catalogue of Chinese Collection of Exhibits for the New Orleans Exposition, 1884-5*”の“*THE CULTIVATION AND MANUFACTURE OF COTTON IN CHINA*”では、中国の綿工業の現状について、「外国の機械を使って中国産の綿を製造するための紡績工場と製織工場を上海に設立することは、長い議論を経て2度試みられた。約4年前に設立されたある会社は、中国人のみが参加し、その発起人は、外国の機械を用いた織布製造を独占することになる特権を政府から取得した。」³¹と中国も機械化が進んでいることを指摘している。

さらに、「中国人が外国の機械に頼れば、自分たちで栽培した綿花から十分良い糸を製造することができるはずであり、糸の価格についても、長い航海の費用がすべてかかってしまう（輸入）糸より安くなるはずである。それでも、英国の製品（British article）なら、差し引いて考えることができない利点があることになる。英国の糸は中国産の原料より繊維が長い原料を紡いで作られており、結果的にその方が強い糸となるため、必ず確実にある程度の最良を受けることになる。」³²公式カタログを書いたのがイギリス人であった影響もあり、中国がなかなか外国製品を取り入れない事へ不満と、綿工業において中国の機械化がたとえ進んでも英国の製品の方が優れていることを述べていた。

中国の展示は、中国政府が万博に積極的に関与しなかったこともあり、これまでの万博と同じように主催者の求める展示で、外国人が求める異国情緒にあふれた中国の民族的な展示となり、中国綿工業の素晴らしさを世界に発信する十分な効果を生むことは出来なかった。

5. 日本の展示

1) 参加の経緯

日本の参加経緯は次のようであった。「千七百八十四年始めて綿花を商品として輸出せるを記念する為千八百八十四年（明治十七年）十二月第一日曜日より翌千八百八十五年五月三十一日迄北米合衆国ルイジアナ州ニューオーリアンズ市に於て万国工業兼綿百年期博覧会開催につき本邦に於ても参同出品あり度旨米国公使ビンガムより井上外務卿宛勧誘来り、是に於て外務卿は之を松方農商務に移し賛否考慮を求めたり。」³³日本の参加は綿製品の輸出増加を期待する意味があった。

1884（明治17）年4月19日、政府は本博覧会に参同出品することに決し、農商務省において出品準備に着手し、5月21日に事務官に駒場農学校助教玉利喜造、農商務省御用掛准奏任高峰讓吉を任命し、9月28日に開催地に向け出発させた³⁴。さらに10月25日に事務官に東京大学幹事服部一三を任命した³⁵。

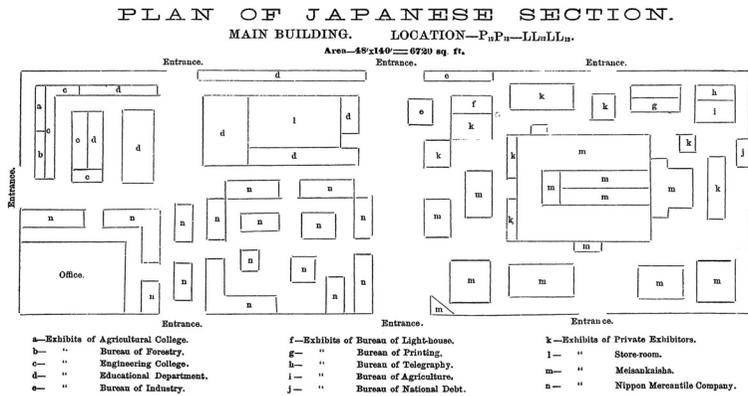
ニューオーリンズ万国博覧会の参同出品については、1884（明治17）年1月ニューヨーク駐在領事高橋新吉が次のような書簡を外務大輔吉田清成に送っている。「我商人等の該会に出品せんと欲するものは宜しく其土地産物の廣狹多寡及貿易の景観等に着目するを最緊要とす。即ちボストン博覧会の如き我出品の商況を概すれば価値の低下なる品のみ買われ透け捌け精工

の美術品に至っては其價高貴なるに瞠若せるのみ」³⁶と、開催地であるニューオーリンズ市が「辺鄙ノ市府」である状況を考へて、普通品を第一とすべきと強調した。美術品についてはニューオーリンズやその近郊の都市では日本をまだよく知らないで「未だ我が精巧の美術を知らず是を知らしめんには該博覧会に如くものなかるべし、是即将来我雑貨の需要を増進するの捭徑にて我貿易を繁盛ならしむる階梯なり只雑貨の出品のみにては万国博覧会に不似合なり仍て従来優等の名誉賞を得たる出品人に五若しくは十品位官費を以て出品せしむべし。」³⁷高橋領事は同年3月20日にも罫紙五枚にわたる書信を再送しており、本博ならびに「当地商況ノ實際」にかんがみた出土品の注意を説明している。彼は新たな市場開拓が期待される、後進地域の南部州における一大イベントであることを強調した³⁸。さらに高橋領事は雑貨の出品について、大量の雑貨が売れ残れば美術品の評判にも影響する為、ニューヨークに在店している日本商会、起立工商会社、森村組の三店による出品で充分であり、その外新たに出品を企画するものは正金銀行で荷為換を貸與することと述べた³⁹。明治政府は京都名産会社と火災保険、運賃、商品の値引き等を詳細に決めた契約書を交わし、出品を委託した⁴⁰。

1884（明治17）年4月19日に布告された出品概則で次のように述べた。「本会ニ陳列スヘキ主品ハ綿ニシテ凡ソ其耕作製造ニ関スル一切ノ物品且万国ノ技術製造及ヒ土地鉱山ニ関スル物産ヲモ陳列セシムルモノトス。本会は合衆国政府、米国内綿養殖会社及びニュー、ヨルレヤンス府の協同保護ヲ以テ開設ス」出品は、「農業、園芸、養魚、天造及製造産物、家具及ヒ附属品、織物衣服及ヒ付属品、工業品、食用産物、教育、技芸物、鉱石金属及木材」の十一区に分類され展示された⁴¹。

上記のようにニューオーリンズ万国博覧会は「綿作を中心とした産業とその発展にかかわる展示を主旨としていたが、出品部門とその内容は多岐にわたり、教育・学術もまた重要な柱のひとつであった。」⁴²明治政府は米国との友好関係を促進・強化するためと、新たな市場開拓の目的をもってニューオーリンズ万国博覧会に参加した。

2) 日本の展示



(図5 日本の展示場)

本館の日本展示品について高峰譲吉は次のように報告している。「日本ノ出品ニハ陶器、銅器、漆器、織物等本邦固有ノ産物ヲ始トシ文部工部内務大蔵ノ諸省其他各局等ヨリノ出品アリ本邦内地ノ工産農産並ニ教育等一般ノ景況ヲ示スニハ蓋シ充分ノ出品ト謂ツヘク就中教育ニ在テハ文部省ノ出品日本物産ヲ示スニハ西京名産会社及日本商会ノ出品主地ヲ占メタルモノナリ」⁴³、更に「元來亜米利加の南部ハ日本人ノ曾テ往来セシ者甚稀ニ從テ本邦製ノ物品ヲ輸出シタル。」

朝日新聞は農商務省の報告として、「列品場の四分の一は農商務・文部・大蔵・内務・工部の諸省及各学校の列品場としその四分の一を日本商会の列品場とし、四分の二を京都名産会社やその他の陳列場とした。」⁴⁴と掲載した。展示品については、「官庁出品の中で数が多く完璧なのは文部省の出品で、学術進歩の著しさを示していた。日本の生産工業の階梯を示し政府人民の進歩を徴すべきものは概ね各官庁出品であったが、府県や日本の有志輩が出品したものにも注目すべきものが多かった。」と述べ、京都名産会社は漆器、織物、紙細工、玩具など今回の為に製造した物品が多かったがその大半は売約済となり、日本商会の出品は陶器が主で肥前の大花瓶や尾張の七宝花瓶など数年の仕入れの品物が多く、広告の為に出品したので販売額は京都名産会社より少なかった。

“*The World's Industrial and Cotton Centennial Exposition, New Orleans, 1884-1885.*”
では日本の展示品は以下のように記載されている。

①教育の展示⁴⁵

本館で広いスペースを占めている日本の最も目立つ部分は、教育に関する展示に割り当てられていた。最初は幼稚園から始まり、ここには、児童を楽しませ教育するために用いられている様々な手段が展示され、いわゆる中等教育に至る段階的な移行が見られた。中等教育の展示では、組織、方法、器具について明確に説明されていた。東京大学からは、日本語だけでなく様々なヨーロッパ言語で印刷された教科書も多数出展されていた。工部大学校（現在の東京大学工学部の前身の一つ）からは、多数の学術著作物の他に、学生が作った精巧な模型も多数出展されていた。ずらりと並んだ数学図面や応用力学のイラストは十分かつ完全なものであった。こうした物の他に、日本における女性教育の展示も、また、聴覚障害者・発話障害者・視覚障害者の教育機関の展示も、きわめて完成度が高いものであった。教育関連の全部門の中で、工業技術分野の学校教育の展示が最も目立つ場所を占めていた。少なからず興味を引いた展示品は、物理的な真実を実証するための装置であった。その材料はどれもありふれた安価なものであったが、装置は見事に目的に適っていた。

②農業の展示⁴⁶

農学校が出展していて、順序立てた完璧な説明により、日本の土壌が持つ能力について優れた知識を得ることができるようになっていた。72種類に及ぶ樹木の展示やそれぞれの最適な用途、25種類の竹の展示、数百種類に及ぶ種子が展示されていた。さらに、きれいに並べられた昆虫標本もいくつかあり、日本は、美しい蝶から、賑やかな蚊、平凡なジャガイモ虫まで、た

くさんの小型生物がいる自然に恵まれた国であることが証明されていた。綿実、綿のボール、繭、生糸、茶、煙草、米、様々な穀物が見られ、全部まとめて、日本の土壌の多様性と肥沃さを証明している。その一方で、果樹園芸学の図を見れば、ミカンや柿を始めとする、風味の良い多種多様な果物が一般的な作物であることがわかる。

③工業の展示⁴⁷—陶磁器、七宝焼、青銅製品、製紙、銅、石炭—

政府の産業局が展示した見本戸棚には、ほとんどすべての種類と様式の日本製陶磁器が並べられていた。また、漆塗りによって木製品を美しく仕上げ保護する手腕を説明している総合的な展示もあった。また、数枚の額を使い、七宝焼の生産に用いられている方法が説明されていた。別のコレクションでは、金属の処理における日本人の技能を見ることができ、青銅製品における見事な色の多様な種類と見本が見られるようになっていた。製紙は、とくに日本が有名とされる産業の一つである。様々な種類の製品の見本が閲覧用に公開されていた。金や銀を含め、世界のほとんどすべての金属が日本にある。とくに、銅は豊富にある。様々な種類の石炭の見本も展示されていた。

④工芸品の展示⁴⁸—京都名産会社と日本商会—

磁土は、質に違いはあるが日本のどこでも見られるため、磁器製品の製作は、最も古く主要な産業として進められてきた。原産物から、あらゆる等級と種類の完成品に至る一般展示を見た後、振り向いた人々は、装飾磁器と優美な青銅製品の見事な見本の数々に見とれていた。これらは、本博覧会に代表を送った日本の民間の2つの商事会社が展示したものであった。

京都の名産会社は主に博覧会での商品展示に限っていた一方、東京の日本商会は、ニューヨークにも大きな支店を持ち、米国のいたる所で日本の陶磁器の卸売商を広く行っていた。考えられる限りで最も繊細な磁器が複数見られ、どれも最も芸術的な構想力や自然からの複写による装飾が施されていた。石鹼の泡のように軽やかで優美なティーカップは、美的な色の調和による光を放っていた。見事な花瓶や炉棚飾りの形は、おそらく過去に宗教的な用途で作られたような物と思われる。香炉は、高貴な青銅や変わりなく素晴らしい薩摩焼で形作られている。また、七宝焼というエナメル加工を施した品の美しさは筆舌に尽くしがたい。その一つ一つから、完璧な芸術を褒め称える詩が聞こえるようである。繊細な金色の漆、象牙や青銅に精巧に施された彫刻や無数の小さな芸術品が惜しげもなく展示されていた。壮大な刺繍が施された絹織物、素晴らしいスクリーン、風変わりでおもしろい衣装の人形から、我々は、この遠く離れた人々の衣装や嗜好を垣間見ることができる。

3) 公式カタログによる日本の産業の紹介

日本のコミッショナーである高峰讓吉と玉利喜造によって書かれた“*Official Catalogue of the Exhibits from Japan, and Descriptive Notes on Agriculture, Art and industry of Japan*” (New Orleans: E.A.Brand, 1885) では、日本の産業を次のように紹介している。

「日本の産業は外国人にとって大いに興味深いものであり、その理由として、他の国では知

られていないことが多い原料を使うこと、ならびに、長期にわたる大変な苦勞の末に様々な生産工程が考案されていることがある。多くの場合、日本の産業は中国や朝鮮に元をたどることができるが、あまりにも多くの改良を重ねてきたため、起源の痕跡はほとんど消滅しており、職人たちが自分たちの特有の性質(キャラクター)を作り出している。』⁴⁹ 日本の産業の魅力は、原料や生産工程が欧米と異なり特殊であり、長い年月をかけて独自の発展を遂げてきたことにある。

製造は小規模で、重機は水車以外使用されていないが、手工具は一般的に使用され、磁器製作などいくつかの産業分野では、かなりの程度まで分業が行われている。日本の産業は機械化が遅れているが、明治になってから15年間で、政府も民間人も、より大きな工場の設立において大きな前進を遂げていることを、以下のように具体的に説明していた。

「蒸気と水力を使う製紙工場、紡織工場、製糸工場が、様々な場所にいくつか建てられた。ガラス工場と毛織工場は東京に1つずつ建てられた。硫酸と硫酸ソーダの工場が大阪と東京に建てられ、ポルトランド・セメントの工場も東京と大阪に建てられた。いくつかの機械工場と造船場が東京、大阪、長崎に建てられ、銅、板金、針金の加工工場が大阪に建てられた。その他、マッチ製造、石鹼製造、染料・顔料・ワニスの製造、鉛筆製造など、いくつかの産業も、数が増え続けている。磁器を焼く窯や、搾油、製紙など、旧来の製造方法に改良を加えた方法がうまく適用されている例もいくつかある。』⁵⁰

江戸時代から培ってきた伝統産業も改良が進み、欧米とは異なる日本の産業の進歩を指摘している。さらに日本独自の食品であり、万国博覧会に参加するとともに常に展示されてきた醤油と酒については以下のように丁寧に説明し、輸出に結びつけようと努力していた。

醤油については、材料や製造過程を詳細に紹介し、製造に多くの手順と時間がかかることを説明していた。「醤油は最も貴重な食品の一つであり、日常的に使われる。数種類の食品と混ぜ合わせることにより、食品の風味が良くなる。広く人気があり、日本の台所には欠かせない存在である。日本国内における醤油の年間消費量は極めて多く、近年では輸出されている。』⁵¹

酒(ワイン)については、日本の酒の醸造には麴(酵母)が使われるが、これは西洋諸国で使われている麦芽のような役割を果たす。「酒は日本のいたる所で作られているが、醸造方法は場所によって多少の差がある。摂津の伊丹と西宮は、最良の酒が醸造される主要な産地である。そこで進められている方法は、より体系的なものである。』⁵²

醤油も酒も初めて接する米国人がほとんどであるため、原料、製造方法を説明することで、安心して手に取ってもらえるように工夫した。その結果、受賞に結びついたものもあった。

灘の魚崎なる雀部方の銘酒角赤は一昨年亜米利加合衆国ルイシヤナ州ニウラルレヤンス博覧会に於て有功賞牌を受け其賞牌も此程到着したるよし」との新聞記事が見られ、さらに製造元による銘酒角赤の広告が賞牌の写真(図6)とともに掲載された⁵³。



(図6 銘酒角赤と賞牌)

4) 日本の展示品の評価

万国博覧会の事務官の報道として、「同会は来館人意外に多く且つ嚴寒のため行旅の不便を感じたる北部諸州も春暖に向いたると以て素封家は漸次出府し是のため我が国名産会社出品中高価の物品三四個と販売せる事を得たり。」と読売新聞が掲載している⁵⁴。また、高峰讓吉が「日本ヨリ持行キシ賣品ハ能ク賣レタリ就中京都名産会社出品ノ如キハスツカリ賣切り其出品中幾種ハ不足ナリシチ恨メル位ナリシ。」⁵⁵と述べたように、日本の展示品は米国で好評を得たようであった。

読売新聞は、ニューヨークのクロツカリー・エンド・グラス・ジュルナル新聞紙が、ニューオーリンズ万国博覧会で「最も世人が注目するのは日本部の出品」であると賞讃した記事を以下のように掲載している⁵⁶。

明治政府の甚だしく多い天然資源の出品や、学術進歩を示す教育上の展示、精密な日本の地図などは観客を魅了するが、「通常観客の最も注目する所は美術的の列品に若くは殊に日本商会の出品は各般の美術品を網羅し洵に大観たりその中殊に著明なる者を挙げれば金銀を以て象眼したる新古の青銅器、猫金古漆器、密彫の木器等は最も驚くべき又各種の絹布、金欄、窓掛、書類其他金銀類の細工は皆賞すべし夫の著名なる有田香蘭社の磁器は容形装飾に一二のみならず極めて眼を属すべし（中略）日本各府県の諸製品を一目するを得せしむれば 優美なる薩摩焼の如き金色桜蘭たる九谷焼の如き其他肥前焼、尾張焼、粟田焼（中略）日本の列品は往古より当時に至るまで美術進歩の景況を示すものにして美術の進化とは果して何なるやを実証する。」⁵⁷日本の古い時代の素晴らしい美術品から、伝統を守りつつ進化しながら現代も製作している各地の特色ある陶磁器を見ることにより、技術の継承と美術の進歩を日本がなし得ていると評価している。

“*The World’s Industrial and Cotton Centennial Exposition, New Orleans, 1884-1885.*”では、日本の展示品が芸術家とマスコミを対象としたものであり、「絵入り新聞や雑誌では、この大博覧会における展示との関連で日本を頻繁に取り上げることにより、そこから受けた印象を証明している。日本は芸術品の生産のみに限っているわけではない。日本は実際、世界の各市場で、もっと安価な等級の家庭用・食卓用磁器の供給で欧州の工場と積極的に競合するようになった。この国では、日本の陶磁器の年間消費量は着実に増えており、やがては、その取引とともに長年定着していた生産物に取って代わると考えてもおかしくないだろう。その部門すべてにおいて、日本には、この大博覧会で行った展示を誇るだけの理由があり、来場者はこの島国が見せた、十分な理解にもとづく進歩的な精神に称賛を惜しかなかった。」⁵⁸と指摘している。

5) ニューオーリンズ万国博覧会後の貿易

明治政府は、ニューオーリンズ万国博覧会の展示で、日本が誇る陶磁器、漆器などの芸術品で人目を惹きつつ、観客に日本の技術力、美的優秀さ、豊富な資源をアピールし、日本の商品

の宣伝に勤めていた。

表1 日本の主な輸出品と金額（単位千円）

輸出品目	1885年		1895年		1905年		1915年		伸び率（％）	
	金額	構成比 ％	金額	構成比 ％	金額	構成比 ％	金額	構成比 ％	10年間	30年間
生糸	13,034	35	47,872	35	71,999	22	152,031	21	267	1,066
製茶	6,854	18	8,879	6	10,584	3	15,402	2	29	124
水産物	2,579	6	3,028	2	7,122	2	10,228	1	17	296
石炭	1,967	5	7,605	5	14,268	4	29,237	4	286	1,386
木材及板	86	0.2	262	0.1	5,197	1	9,210	1	204	11,793
陶磁器	695	1.8	1,955	1	5,324	1	6,953	0.9	181	900
綿織物	178	0.4	2,316	1	11,492	3	38,511	5	1,201	21,535
メリヤス製品	19	0.05	167	0.1	2,069	0.6	12,363	1	778	64,968
絹織物	58	0.1	10,061	7	30,259	9	43,219	6	17,246	744,145
輸出品総額	37,146	100	136,112	100	321,534	100	708,307	100	266	1,806

（『明治大正国勢総覧』東洋経済新聞社1988年、466 - 486頁より作成）

表1で示すように、ニューオーリンズ万国博覧会以降輸出は目覚ましく増加している。1885（明治18）年当時37百万円であった輸出は、10年後の1895（明治28）年には金額ベースで約3.7倍の1億36百万円に増加、30年後の1915（大正4）年には約19倍の7億8百万円まで増えた。輸出品目の中で綿織物、絹織物、メリヤス製品、木材及板などの圧倒的な伸びが目立っている。

日本の主要な手工業は、江戸時代後期から明治時代初期において、「江戸時代の、とくに18世紀後半以降各地で成長した手工業が『在来産業』としてそのまま成長を続けたものであった。たとえば酒は灘、綿糸・綿織物は畿内や濃尾・瀬戸内などで、醤油は野田や銚子、生糸・絹織物は桐生・足利などで生産の発展がみられた。」⁵⁹ニューオーリンズ万国博覧会でも、日本各地から織物、伝統工芸品、食料品が出品され、万国博覧会で評価を受けたことで、輸出の増加につながり、大きく成長した伝統産業の資本の蓄積が日本の近代化に大きく貢献したこととなった。

日本経済は1880年代後半から新たな成長を開始した。開港および明治維新という大きな制度変革が、先進的な産業技術の導入可能性を生み出し、それを現実のものとする政府および民間諸主体の努力が、高い生産性を発揮する企業の勃興と成長を実現した⁶⁰。鉄道や紡績といった近代産業への投資を行った商人や地主の多くが、醸造業や織物業、製茶業といった在来産業によって富を蓄積した人々であった⁶¹。地域経済における在来産業を基礎とした近代産業の発展と、在来産業の近代工業化が並行して進み、全国的な拡がりをもった産業革命が急速に展開することになったのである⁶²。

6. おわりに

ニューオーリンズ万国博覧会の開催の目的は、小泉八雲が指摘するように「展示の基本計画は、アメリカ国旗における星の華やかな集いのように、巨大であるが統一のとれた集団としてわれらが州と準州すべての展示空間を見せることにあった」⁶³、そのためTHE COLLORED PEPOLEの展示で黒人の進歩や才能を見せることで、南部が1つになったことを示したかったと思われる。

ニューオーリンズ万国博覧会は、参加国は27カ国であったが日本、メキシコ、中国以外の国はあまり熱心に展示しなかった。中国は、綿が重要な産業であったことから、万国博覧会の主旨に忠実に綿製品の展示に特化した。日本は日本の独自の文化、国土の豊かさ、産業の展示に注力し、日本をアピールした。その結果、高峰讓吉が「従来支那ノ属国ナリト誤認スル日本品モ英仏独品ニ比シテ甚タ美観ナルヲ覺エシメタリ。」⁶⁴と述べるように、欧米と劣らぬ、中国と異なるアジアの一国である存在を示すことが出来た。

「我出品人中一等賞を得るもの三十余名ありと同府駐在事務官より其筋への報知ありたり。」⁶⁵、「熊本県管下菊池郡公立隈府小学校生徒の手工に係る木擧書及び裁縫品並に八代郡八代町湯野肇外二名の発明に係る木製石版」⁶⁶が名誉賞状を受けた記事からも、日本の展示品がニューオーリンズ万国博覧会で一定の評価を受けたことが分かる。

ニューオーリンズ万国博覧会の展示品は、明治政府が政府関係以外の出展を生糸、酒、醤油などを扱う業者を除いて、日本商会と京都名産会社に限ったことで、日本商品のブランドと品質の高さを保持しようと努力していた。明治政府は、万国博覧会の展示を通して、生産技術開発の進捗状況、伝統工芸品による美的技巧的優秀さ、欧米に劣らぬ教育水準を示すことで日本の近代化をアピールし、国力増強のため何としても貿易増加に結びつけたいとの政策的意図を持っていた。

¹ 大井浩二『アメリカ南部と万国博覧会第1回配本ニューオーリンズ万国博覧会（1884-1885）別冊日本語解説』ユーク・プレス、2017年、1頁。

² 同上2頁。

³ 『朝日新聞』1884年8月24日。

⁴ 小泉八雲「ニューオーリンズ博覧会－日本の展示物」『ラフカディオ・ハーン著作集』第4巻、恒文社、1987年、492頁。

⁵ 内藤隆夫「日本の産業革命」『地域と経済第6号』札幌大学経済学部付属地域経済研究所、2009年、137頁。

⁶ 平田論治「1884－5年ニューオーリンズ博覧会における日本の教育の紹介」『筑波教育学研究』第2号2004年、1－16頁。

- ⁷ 高成玲子「ハーンは浮世絵に何を見たか」『富山国際大学現代社会学部紀要』2009年、1-15頁。
- ⁸ 前掲『アメリカ南部と万国博覧会第1回配本ニューオーリンズ万国博覧会（1884-1885）別冊日本語解説』4頁。*World's Fairs in the American South Part 1: New Orleans 1884-1885 (The World's Industrial and Cotton Centennial Exposition, New Orleans, LA., USA)* Edited by Koji Oi Professor Emeritus of Kwansai Gakuin Univ. Volume 2.
- ⁹ 高峰讓吉「米国ニューオーリヤンス萬国工業博覧会 演説・高峰讓吉および論評」『工學會誌』四輯、四十七卷、1885年、627頁。
- ¹⁰ 前掲『アメリカ南部と万国博覧会第1回配本ニューオーリンズ万国博覧会（1884-1885）別冊日本語解説』4頁。
- ¹¹ *World's Fairs in the American South Part 1: New Orleans 1884-1885*, Volume 1, p.6.
- ¹² *World's Fairs in the American South Part 1: New Orleans 1884-1885*, Volume 2, p.379.
- ¹³ Ibid., pp.379-380.
- ¹⁴ Ibid., 380.
- ¹⁵ Ibid.
- ¹⁶ May Beth Norton, 本田創造 監修『アメリカの歴史第3巻 南北戦争から20世紀へ』三省堂、1996年、229頁。
- ¹⁷ 同上230頁。
- ¹⁸ *World's Fairs in the American South Part 1: New Orleans 1884-1885*, Volume 2, INTRODUCTION.
- ¹⁹ 小泉八雲「ニューオーリンズの政府展示品」『ラフカディオ・ハーン著作集』第4巻、恒文社、1987年、519頁。
- ²⁰ 馮赫陽「初期万国博覧会に見られる『中国趣味』から『日本趣味』への趨勢について」『東アジア文化交渉研究』第3号、2010年、513頁。
- ²¹ 鈴木智夫「万国博覧会と中国—1851～1876—」『愛知学院大学人間文化研究所紀要』第11号、1996年、69頁。
- ²² 小林隆夫「イギリスの東漸と東アジア」『東アジア近現代通史1』岩波書店、2010年、109頁。
- ²³ 前掲「万国博覧会と中国—1851～1876—」、70-74頁参照。
- ²⁴ 徐蘇斌「オリエンタリズムとナショナリズム」『万国博覧会と人間の歴史』思文閣、2015年、596頁。
- ²⁵ 同上599頁。
- ²⁶ 前掲「米国ニューオーリヤンス萬国工業博覧会 演説・高峰讓吉および論評」642頁。

- ²⁷ *World's Fairs in the American South Part 1: New Orleans 1884-1885*, Volume2, p.395.
- ²⁸ Ibid.,p.396.
- ²⁹ Ibid.,pp.396-397.
- ³⁰ 小泉八雲「ニューオーリンズに見る東方の国」『ラフカディオ・ハーン著作集』第4巻、恒文社、1987年、499頁。
- ³¹ *World's Fairs in the American South Part 1: New Orleans 1884-1885*, Volume3, Catalogue of Chinese Collection of Exhibits for the New Orleans Exposition 1884-5 (1885),xvii.
- ³² Ibid.,p.119.
- ³³ 永山定富『海外博覧会本邦参同史料（第3輯）』フジミ書房、1997年、37頁。
- ³⁴ 国立公文書館蔵『亜米利加ルイジアナ州ニウラルリン府開設万国工業及綿花輸出第一百年期博覧会ニ帝国政府参同一件』アジア歴史資料センター、3-3119。
- ³⁵ 同上。
- ³⁶ 前掲『海外博覧会本邦参同史料（第3輯）』37頁。
- ³⁷ 同上38頁。
- ³⁸ 前掲「1884－5年ニューオーリンズ万国博覧会における日本の教育の紹介」6頁。
- ³⁹ 前掲『海外博覧会本邦参同史料（第3編）』、39頁。
- ⁴⁰ 国立公文書館蔵「亜米利加合衆国ルイジアナ州ニウ、チルレヤンス府万国工業兼綿百年期博覧会出品受託規則」1204、『亜米利加ルイジアナ州ニウラルリン府開設万国工業及綿花輸出第一百年期博覧会ニ帝国政府参同一件』、アジア歴史資料センター。
- ⁴¹ 国立公文書館蔵「亜米利加合衆国ルイジアナ州ニウ、チルレヤンス府万国工業兼綿百年期博覧会出品規則」1193、『亜米利加ルイジアナ州ニウラルリン府開設万国工業及綿花輸出第一百年期博覧会ニ帝国政府参同一件』、アジア歴史資料センター。
- ⁴² 前掲「1884－5年ニューオーリンズ万国博覧会における日本の教育の紹介」2頁。
- ⁴³ 前掲「米国ニウオーリヤンス萬国工業博覧会 演説・高峰讓吉および論評」630頁。
- ⁴⁴ 『朝日新聞』「外国博覧会景況」1885年6月11日。
- ⁴⁵ *World's Fairs in the American South Part1: New Orleans 1884-1885*, Volume2, *The World's Industrial and Cotton Centennial Exposition,New Orleans, 1884-1885*, p.393.
- ⁴⁶ Ibid.,pp.393-394.
- ⁴⁷ Ibid.,p.394.
- ⁴⁸ Ibid.,pp.394-395.
- ⁴⁹ *World's Fairs in the American South Part 1: New Orleans 1884-1885*, Volume3, ”*Official Catalogue of the Exhibitsfrom Japan, and Descriptive Notes on*

Agriculture, Art and industry of Japan” (New Orleans: E.A.Brand, 1885) p.55.

⁵⁰ Ibid.,p.56.

⁵¹ Ibid.,p.67.

⁵² Ibid.

⁵³ 『朝日新聞』「銘酒各赤」、1886年、12月5日。

⁵⁴ 『読売新聞』「外国博覧会景況」1885年6月6日。

⁵⁵ 前掲「米国ニューオーリヤンス萬国工業博覧会 演説・高峰讓吉および論評」640頁。

⁵⁶ 『読売新聞』「日本出品の評判」1885年2月19日、『朝日新聞』1885年2月21日大阪朝刊「米國萬國博覧会日本出品々評」。

⁵⁷ 同上。

⁵⁸ *World's Fairs in the American South Part1: New Orleans 1884-1885*, Volume2, p 395.

⁵⁹ 井奥成彦『日本経済史1600-2000 歴史に読む現代』慶応義塾大学出版会、2009年、78頁。

⁶⁰ 沢井実・谷本雅之『日本経済史』有斐閣、2016年、237頁。

⁶¹ 中村尚史「日本の産業革命」『岩波講座 日本の歴史』第16巻、166頁。

⁶² 同上176頁。

⁶³ 小泉八雲「ニューオーリンズの政府展示品」『ラフカディオ・ハーン著作集』第4巻、恒文社、1987年、519頁。

⁶⁴ 前掲「米国ニューオーリヤンス萬国工業博覧会 演説・高峰讓吉および論評」641頁。

⁶⁵ 『読売新聞』「萬國博覧會受賞人」1885年7月22日朝刊。

⁶⁶ 『読売新聞』「名誉賞状の贈付」1886年9月14日朝刊。

図1. *World's Fairs in the American South Part1: New Orleans 1884-1885 (The World's Industrial and Cotton Centennial Exposition New Orleans, LA., USA)* Edited by Koji Oi Professor Emeritus of Kwansei Gakuin Univ. Volume1,2017, p12.

図2. Ibid.,p13.

図3. Ibid.,p15.

図4. Ibid.,p14.

図5. *World's Fairs in the American South Part1: New Orleans 1884-1885 (The World's Industrial and Cotton Centennial Exposition New Orleans, LA., USA)*, Volume3, OFFICIAL CATALOGUE OF THE EXHIBITS FROM JAPAN, p7.

図6. 『朝日新聞』「銘酒角赤」、1886年、12月5日。